

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

〔談話室〕 365分の1

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-02-06 キーワード: 作成者: 石井, 研士, Ishii, Kenji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001364

365分の1

石井研士

しばらく前に本を読んでいて驚いたことがある。なんと三割の家庭が正月にお節料理を用意しないのだという。元旦は寝正月でも用意しない。元日の朝ひとり菓子パンを食べる子どもがいるとも書いてあった(岩村暢子『普通の家族がいちばん怖い―徹底調査!破滅する日本の食卓』新潮社、平成19年)。お正月は日本人の国民的行事でもっとも宗教的になる機会のひとつ、と思っていたので、本で見えるお正月の様子はショックだった。

ところが最近になって、お正月の実施率は、正確に言えば、お正月の実施率が下がり、依然として高い実施率を維持している行事に抜かれたのである。それは「誕生日」である。これも正確に言えば「家族の誕生日の祝い事」である。日本には従来、生後満一歳の初誕生以外に年々の誕生日を祝う習慣はなかった。年齢を自分の誕生日を迎えることで数える満年齢ではなく、正月に加齢する数え年で年齢を数えたためである。生まれたときに数えで一歳として、元旦を迎えると二歳になった。三月に生まれても、十月に生まれても数えの一歳で、翌年にはそろって二歳になるとする。

明治時代になって、満年齢による年齢計算が規定されたが、数え年は生活の中で用いられていた。戦後もこうした状況は続き、場合によると、今でも七五三は数えなのか満年齢かと考え込むこともある。

一般庶民の家庭で誕生日を祝う習慣が定着したのは第二次大戦後のことである。高度経済成長期に、家族で祝う誕生日は盛んになっていく。子どもや両親へのプレゼントは豪華になっていき、デパートを初めとする商売はカタログを作って消費を煽った。

私は高度経済成長期に小学生時代を送ったが、母親に頼んで、毎年友達を呼んで誕生日のお祝いをしてもらった。友

達はちよつとしたプレゼントを持ってくる。これが目当てだったが、自宅で食事をして遊んでお土産を用意するという、子どもにとっては楽しい機会だった。こうした機会以外にも、家族でバースデーケーキを食べた楽しい記憶が残っている。ハッピーバースデーの歌を歌ったと思うが、この英語の歌はいつ頃誰が持ち込んだのだろうか。とにかく、誕生日は日本風ではない、西洋、とくにアメリカ風だったと思う。

近年、これまで広く行われていた年中行事に陰りが見えている。お盆やお彼岸の墓参りが減少した。各家の個別行事という感じが強くなっていた端午の節句や桃の節句は、少子化に伴って行われているんだかどうだかわからなくなった。都市部では鯉のぼりはほとんどみられない。

ところが、誕生日は異なっている。子どもから大人まで、とにかく誕生日だけは忘れないということらしい。とくに赤ん坊の誕生日祝いは盛んである。生まれて30日ほどたつて初宮参り、100日ほどでお食い初め、そして生後6ヶ月でハーフバースデー、そして1歳の誕生日となる。ハーフバースデーは近年普及したと思われるが、家族の大切な記念日である。赤ちゃんに天使の羽を背負わせて、背景を用意して写真を撮る。インターネットで検索すると、驚くほど多くの写真が出てくる。

誕生日は、夫婦にとつて結婚記念日とともに愛情を確かめ合う日である。相手の誕生日を忘れるものなら、夫婦関係にひびが入るかもしれない。

地域共同体が崩れ、単身世帯がもつとも多い家族構成になった。単身者はこれまでと同じように家族や「家」を母体にした年中行事を行うのだろうか。正月のめでたさは低減し、お盆の墓参りも人影はなく、残るのは個人の「誕生日」だけ、なんてことはないよね。

(宗教学／現代社会と宗教、情報化と宗教)